

「平成28年度生物多様性保全研修について」

計画保全部 計画課

国有林では、生物多様性保全を確保した上で、地域の実情に応じた森林の管理経営を目指しています。このため、生物多様性に関する知見を蓄積・活用できる国有林職員の育成を目的として、「生物多様性保全研修」を実施しました。

本年度の研修は、5月16日～20日の5日間の日程で、7名の研修生の参加のもと座学と現地実習を実施しました。

初日と最終日の座学では、国有林において生物多様性の保全を目指す意義や、希少種の保護と森林施業等の調整の事例等、基礎的な知識の習得に努めました。

猛禽類調査の実習

2日目及び3日目は群馬県みなかみ町の「赤谷の森」において、(公財)日本自然保護協会の出島氏から、森林性の猛禽類であるイヌワシやクマタカを指標とした森林管理の具体的な取組を説明いただいた後、双眼鏡や望遠鏡を用いて実際に猛禽類調査を体験し、イヌワシがつがいで飛

翔して獲物を探している行動を観察することができました。



猛禽類を観察するための機材の取扱方法について説明を受けている様子



研修生が観察し撮影したイヌワシのつがい



猛禽類調査を体験する研修生

猛禽類の保護と森林資源の循環利用

4日目は、森林資源のバイオマス利用を推進している群馬県上野村の国有林において、クマタカ等の猛禽類の生息環境を保全しつつ、森林資源の循環利用を図るための伐採計画の状況を説明しました。

その後、上野村の木質バイオマスの利用状況について、上野村振興課の佐藤氏から説明いただき、研修生も真剣に聞き入っていました。

研修を終えて

研修生からは「猛禽類は森林施業の実施に当たって、やっかいなものというイメージがあった。今回の研修で、生物多様性を保全するのに必要なことは我慢ではなく攻めの姿勢で保全・保護と利用を結びつけていくこと、全ては繋がっていることだと感じた」「国有林が地域と連携することの重要性を知った。そのためには関係者に丁寧に説明することが重要」等の意見がありました。

研修生がそれぞれの職場に戻り、今回の研修で得られた知見が活かされることを期待しています。